

ウチとソトをつなぐファシリテーション

——ファシリテーション研究方法序説——

田 坂 逸 朗

(受付 2016年10月31日)

1. は じ め に

このような表題としたのにはわけがある。

デカルトの『方法序説』の原題 (Discours de la methode) の、「序説」にあたる単語 Discours は、体系化される前の試みの論考といった意味あい、思索の過程を順を追って記述した、続く論考への序となるもの、との語用だったという^{*1}。この中でデカルトは、「良識」や「道徳」と並べて「真理探究の準則」として以下を列挙している。1. わたしが真理と認めるものを探求する (明証) 2. 難問の理解のために多数の小部分に分けて考察する (分析) 3. もっとも単純なものからもっとも複雑なものへ、事物に秩序を仮定する (総合) 4. 完全な列挙と広範な再検討を最後に行う (枚挙)。これに範をとるなら、ファシリテーションという一般語に、特定の事象を指す語用としての役割が与えられたのち、約1世紀を過ぎ、援用と研究とが盛んになってきた今こそ、各分野に遍在しているファシリテーションの、“本質たるファシリテーション研究”が必要であると考え、その Discours をここに論考したいという思いで、このような表題とした。さらには、そのファシリテーションについて、(社会への喧伝に大きく貢献した産業領域で) 機序と実用価値として語られてきたスキル (技能論) と向き合い方 (マインド) に、実務者としての筆者の経験からの考察を加除しながら、ファシリテーションの本質像に迫りたい。ひいては、稿末にて、援用されている各分野を横断するファシリテーション研究の環境づくりへの提言を行う。

社会心理学のクルト・レヴィンは、集団力学 (グループ・ダイナミクス) において「行動と環境は相関関係にある」としている^{*2}。ミクロ経済学のマイケル・スペンスは、市場における情報に非対称性があった場合において、情報を保有している側が、情報を持たない側に情報を開示する行動を「シグナリング」と定義している^{*3}。いささか強引ではあるが、市場も集団も、それはある種の環境である、ととらえるとき、シグナリングは、行動 (働きかけ) として、レヴィンのいう「環境」全体に何らかの作用をもたらすと考えることができる。集団内での諸行動は、ある意味すべてシグナリングとして作用し集団という環境を変えていく。かつ、シグナリングが集団内のみにとどまるなら、集団はより個化・特化し、集団

のソトを含む社会から見るときの全体最適を失っていく。集団＝ウチが、自家撞着的に、ウチ＝内化してはならないという意味において、どうやらそこに「ファシリテーション」の役割がある。

社会評論家のダニエル・ピンクは、外的報酬と内発的動機に関する論説を『モチベーション3.0』としてまとめている^{*4}。ミハイ・チクセントミハイのフロー状態などの研究をひもといたこの論考は、ウチなる動機こそが人を動かすとして、交換条件付けとなる外的報酬ではないソトからのさまざまな働きかけについて論じている。フロー状態にあるウチは内発的であるがゆえの強い動機を生むことができるが、またウチとしての限界も持つ。この、個人のウチとソトの対比はそのまま集団のウチとソトになぞらえることができ、ソトからの働きかけの担い手をファシリテーターと捉えることもできる。

これらの論説は、10年を超える実務としてのファシリテーターを経験してきた筆者がたびたび感じてきたファシリテーションの感覚や機序とも合致している。ウチはウチを強化しながらもソトとつながるときさらによい成果を生み、ソトがソトであることを強調しながらもウチと融合するとき成果に質的向上が見られる。

教育学や心理学をその出自としながら、実学としてのファシリテーションは、産業領域における実利手法として着目されたのちは、スキル（応用技能）論とマインド（志向姿勢）論との間を行き来しながら定義を確立させ、そして現実と向きあってきた。仮にここに、その定義へ、さらに現実からの検証とフィードバックの機会が設けられるなら、筆者はその適任にあると確信している。特に公共領域においては、もはや社会合意のためのひとつの理論的バックボーンとなりつつあるファシリテーションが現場にもたらしてきたウチとソトをつなぐ効果についての検証は、定義・方程式としてのファシリテーションの役割論につながるものであり、また全体最適的なファシリテーション像が確立してゆく過程を内包しているものでもある。それはひいては、ファシリテーションが対象としてきた集団や事象の、さらにソトにある集団・事象としての社会と、大きな相関性（相互作用性）をなすものとして、来たるべき社会包摂の像を描くことになる。

そこでこの論稿のリサーチクエスションは以下である。「ファシリテーション学」の有用性をイメージしつつ、いかにスキルを発揮するか、いかにマインドを整えるかという実学実利のファシリテーションから、それを、「ウチとソトをつなぐ」実務ファシリテーションの側から検証しつつ、学際的な研究領域としての「ファシリテーション学」の確立を目指すことはできるか。この視座でファシリテーションを論じていく。

日本学術振興会科学研究費助成事業（科研費）の「系・分野・分科・細目表」（平成29年度）321（単語数としては3,665語）のキーワード群に「ファシリテーション」の語はない^{*5}。

いまそこにあるファシリテーションの研究が実学を超えて、「ファシリテーション学」として日本において確立されるなら、それは、ファシリテーションは、これからどこへ向かうのか、という問いにとって大きなマイルストーンとなる。教育、医療看護、心理学等に端を発し、情報学、自己啓発論、環境学、組織論、マネジメント論、社会公共論を経て、その対象の中に込められてきた領域から「ファシリテーションの本質研究」に焦点をあて、より基礎的な研究と学際的な研究という明確な構造を持つ学問へ、よりリベラルアーツとしての学習領域へ向かう大きなマイルストーンである。

日本における実務者のひとりとして、この10年何を見てきたか、何を感じてきたか、どうふるまってきたか、ファシリテーションの動向をどう読み、これからどんな役割を任じていくのか。「よく知っている」がいちばんこわい。その理解はその個人独特の解釈に基づく、と常々意見の可視化、各意見間の構造化を図ってきた現場のファシリテーターが、ファシリテーションは学問的研究分野となりえるか、についてこの論稿において、「ファシリテーションのウチとソト」をつなぐ。

2. CiNii データベースと科学研究費助成事業データベース

ファシリテーションを「集団の知的相互作用を促進する働き」と定義する堀公俊は、ファシリテーションの応用分野を6つとしている^{*6}。①問題解決型（ビジネス・政治分野）、②合意形成型（社会活動・学術分野）、③教育研修型（ビジネス・社会教育・学校教育分野）、④体験学習型（自然・環境分野）、⑤自己表現型（アート・芸術分野）、⑥自己変革型（ビジネス・生活分野）である。この出所として中野民夫の『ワークショップ』を挙げているが、中野民夫は、ワークショップの分類の試みとして、以下の6つを挙げている^{*7}。1. アート系、2. まちづくり系、3. 社会変革系、4. 自然・環境系、5. 教育・学習系、6. 精神世界系の6分野である。

応用や援用が考えられる各分野において、では「研究」はどんなされてきたか、現在、研究対象としてのファシリテーションはどのような分野において扱われているか、データベースを調査し俯瞰する。論文検索のデータベース国立情報学研究所（NII）学術情報ナビゲータ CiNii Articles と科学研究費助成事業データベースの2つのデータベースで、「ファシリテーション」を含む論文、および研究助成事業を検索し表にまとめた^{*8}。

2-1 CiNii Articles 論文検索

CiNii Articles の論文検索では、2016年12月31日現在、721本が挙げられている。これは、博士論文や修士論文も含む、おもに学会誌掲載論文、紀要、専門誌の記事等で構成されてい

る。1974年に最初の学会誌掲載があり（『セミナー ファシリテーション・テクニク』, リハビリテーション医学 11 (1)), 1986年に最初の専門誌掲載が見られ（『Idiopathic Scoliosis に対する Vojta 法の試み』, 理学療法学 13 (5)), 1989年に最初の紀要が見られる（『エンカウンター・グループにおける心理的ドロップアウトに際してのファシリテーション—問題メンバーとしての独占家との成功事例を通して』, 専修人文論集 (43)）。

タイトルや掲載誌, サマリーなど検索ページで閲覧できる情報から, 分野を推察し, 論文か記事か, 学会誌, 専門誌, 紀要というカテゴリーを推察した。推察の範囲であること, 誤認を含む可能性のあることには留意しておく必要があるが, 大きな潮流を読む際には差し障りはないと判断した。この学会誌, 専門誌, 紀要のそれぞれの数の推移の違いも興味深い, ここでは学術研究からの考察とするため学会誌掲載論文と紀要掲載論文を集計し, かつ, データベース掲載処理が完了していないであろう2016年分をのぞき, 考察をおこなった*9。その総数は270であった。表1は, 分野別に時系列に沿って見るための集計表である。

分野は, 中野, 堀の分類に準拠しつつ, ファシリテーションの援用が顕著な9つをこの論稿用に分類した。01アート・デザイン, 02社会・公共・地域, 03環境・科学, 04学校教育・社会教育, 05心理学・スポーツの5つは, 中野の分類にも堀の分類にもあるもの（それぞれ, 1. アート系 ⑤自己表現型（アート・芸術分野）, 2. まちづくり系, 3. 社会変革系 ②合意形成型（社会活動・学術分野）, 4. 自然・環境系, 5. 教育・学習系 ③教育研修型（ビジネス・社会教育・学校教育分野）, 6. 精神世界系 ④体験学習型（自然・環境分野）⑥自己変革型（ビジネス・生活分野）に対応）, 06経営・組織・産業は, 中野の分類からさらに堀の分類によって追加されたものである（①問題解決型（ビジネス・政治分

表1：CiNii Articles 論文検索 学会誌と紀要の掲載数の推移

	1974~ 1993	~1995	~1997	~1999	~2001	~2003	~2005	~2007	~2009	~2011	~2013	~2015	計
01 アート・デザイン			1							2	2		5
02 社会・公共・地域					1	1	3	2	3	5	5	11	31
03 環境・科学								1	3	2	4	2	12
04 学校教育・社会教育				1			1	9	12	20	29	38	110
05 心理学・スポーツ	1		3	1	2	2	3	3	6	3	9	6	39
06 経営・組織・産業							2	4	3	7	5	7	28
07 医学・医療	13	1					2	1	1	3	3	4	28
08 看護学・看護教育								2		1			3
09 情報学						1		3	3	2	3	2	14
年次計	14	1	4	2	3	4	11	25	31	45	60	70	270

野)に対応)。さらには、中野、堀の分類に明示的でないものを、07医学・医療、08看護学・看護教育、09情報学と3分野追加した。特に、08看護学・看護教育は後掲する科研費における研究数が顕著であったため、07医学・医療からさらに独立させた^{*10}。

参考として、専門誌の推移も示しておく(表2)。

表2：CiNii Articles 論文検索 専門誌の掲載数の推移

	1986~ 1993	~1995	~1997	~1999	~2001	~2003	~2005	~2007	~2009	~2011	~2013	~2015	計
01 アート・デザイン							1						1
02 社会・公共・地域						2	12	4	3	5	5	5	36
03 環境・科学					1	1	1		1	2	1		7
04 学校教育・社会教育							6	13	25	6	6	13	69
05 心理学・スポーツ						2	7	2			1		12
06 経営・組織・産業						8	18	27	55	39	30	17	194
07 医学・医療	4	1		1	4	7	4	11	3	2	1	2	40
08 看護学・看護教育								1		1	2	18	22
09 情報学													0
年次計	4	1	0	1	5	20	49	58	87	55	46	55	381

学会誌と紀要では、分野計で半数近くを学校教育・社会教育分野が占める。次に心理学・スポーツ分野、社会・公共・地域分野が目立つ。その学校教育・社会教育分野における推移では2011年から大きく立ち上がり、その後の増加が顕著である。専門誌の分野計では、半数以上を経営・組織・産業分野が占めており、その推移では2008年に55本のピークがありその後減少の傾向にあることと対照をなしている。

「集団の知的相互作用を促進する働き」という堀の定義ほか、いくつかのファシリテーションの語用の意味するところは後述するが、論文検索におけるその語用は、集団を対象とするファシリテーションにとどまらない。医学・医療分野の論文、『セミナー ファシリテーション・テクニク』(リハビリテーション医学 11 (1), 1974) はじめ初期のファシリテーションは、リハビリテーションや義肢装具に関する専門用語としての語用が主で、2013年に境に『対話の場作りをすすめるファシリテーターと省察的实践』(日本プライマリ・ケア連合学会誌 36 (2), 2013), 『ファシリテーションの手法を用いたパス活動の活性化・推進』(日本クリニカルパス学会誌 = Journal of Japanese Society for Clinical Pathway 17 (2), 2015) など、医療技術から集団を対象とするファシリテーションへと軸足が移っている。集団を対象とするファシリテーションへ軸足が移ることは、専門誌が先行している(『ここで

差がつくチーム運営術 ファシリテーションで加速するチーム力 (第 1 回) 本当のチーム・アプローチを促進するために——今、なぜ医療現場に「ファシリテーション」なのか』(地域リハビリテーション 1 (1), 2006) など)。

学校教育・社会教育分野では、『高校生を対象とした非構成的エンカウンター・グループの一事例——実践上の諸問題をめぐって』(本山智敬, 野島一彦, 九州大学教育学部紀要 教育心理学部門 43 (1・2), 1998) が先行して論文を発表しているが、以後、エンカウンター・グループ, 体験学習, 協同学習, グループ・アプローチ, ラボラトリーメソッド, ディブリーフィング, 応用行動分析学 (ABA), 双方向型授業, ファシリテーション型授業, ゲーミングファシリテーション, プロジェクトベース学習, アクションリサーチなどがキーワードとなってきた。特に, 2011年以降は, ロジックツリー学習, ピア・ラーニング, 校内研修, ファンクショナル・アプローチ, 働きがいのある学校づくり, ファシリテーション・グラフィック, アクティブラーニング, デザイン思考, 創造的協同活動, プロセス・エデュケーション, メタ認知スキルなどがキーワードとなっている。特にアクティブラーニングは, 2013年以降, 『アクティブラーニングにおけるファシリテーション導入の方策と課題 (中学・高校教育の実践と研究, 課題研究)』(武田正則, 年会論文集 (29), 2013) などファシリテーション論文におけるキーワードとして 7 本がヒットした。

初期の心理学におけるファシリテーション論文はエンカウンター・グループに関する研究が牽引していた (『エンカウンター・グループにおける心理的ドロップアウトに際してのファシリテーション——問題メンバーとしての独占家との成功事例を通して』(岡村達也, 藤岡新治, 専修人文論集 (43), 1989)。心理学分野で表題に使用された主なキーワードは, エンカウンター・グループ, グループ・プロセス, エンパワメント, ディブリーフィング, パーソン・センタード・アプローチ, ワールドカフェ, ダイアログ, コミュニケーション・デザイン, 認知モデルなどである。数は少ないものの, スポーツ学におけるファシリテーション研究もなされている (『大学生陸上競技選手を対象とした一体感向上のための短期ワークショップ型ファシリテーションプログラムの効果』(荒井弘和, 青柳健隆, 日比千里, スポーツ産業学研究 23 (1), 2013) など)。

社会・公共・地域分野では, 『ファシリテーショングラフィックによる住民参加について (市民参加のまちづくりと高齢者居住, 計画・技術報告)』(山下昌彦, 日本建築学会北海道支部研究報告集 (73), 2000) を皮切りとしながら, 住民参加, 都市計画策定, 事業プロセス, エンパワメント, リスクコミュニケーション, ボランティアファシリテーション, 地域防災, 市民活動, まちづくり, 協創的ヒアリング, 市民ファシリテーター, コミュニティ活動, パブリック・プロセス, シティズンシップ, 地方創生, ステークホルダーなどをキーワードとしてきた。

アート・デザイン分野におけるファシリテーション研究では、『住み手の意識をつむぐファシリテーション（参加のデザインにおける意識づくりの技術／1）（技術ノート）』（延藤安弘，森永良丙，建築雑誌 112（1405），1997）や『自然環境を舞台にした造形ワークショップの取り組み：「Danke アートプロジェクト」への関わりとアート教育についての一考察』（渡辺一洋，環境芸術：環境芸術学会論文集（9），2010）などの論文があり，参加のデザイン，アートアクティビティ，デザイン討論支援，ワークショップ，デザインファシリテーションなどがキーワードになっている。

環境・科学分野におけるファシリテーション研究では、『小笠原諸島における島民の主体性を引き出すエコツーリズムモデルの研究』（秋山友志，アキヤマトモユキ，立教ビジネスデザイン研究 5）や『ミニ・サイエンスカフェを活用したファシリテーションの演習——科学技術コミュニケーター養成ユニットでの授業実践の報告』（三上直之，科学技術コミュニケーション（3），2008）などの論文があり，主体性，ESD，自然学校，サイエンスカフェ，科学技術コミュニケーションなどが表題のキーワードとなっている。

経営・組織・産業分野におけるファシリテーション研究では、『ビジネスプロセス改革プロジェクトにおける主要成功要因』（石井成美，中京短期大学論叢37（1），2006）などの論文があり，組織変革，マネジメント，会議，知識経営，プロジェクトファシリテーション，イノベーション，コーチング，学習する組織，研修デザイン，実践共同体，製品開発，雇用ポートフォリオ，なぜなぜ分析手法，ワーク・ライフ・バランスなどが表題のキーワードとなっている。

情報学分野におけるファシリテーション研究では、『意見交換の活性化を目的とした視覚情報をもつ電子掲示板システム』（高橋拓也，井上久祥，電子情報通信学会技術研究報告，ET，教育工学 103（467），2003）などの論文があり，視覚情報，コンテンツ管理，LMS（学習管理システム），デジタルメディア，会話ファシリテーションロボット，意見集約支援システムなどが表題のキーワードとなっている。

『火山荒原におけるシモフリゴケ（*Racomitrium lanuginosum*）の先駆樹種に対するファシリテーション効果』（南 佳典，勝又暢之，沖津 進，蘚苔類研究 10（12），2013）など環境・科学分野や医療分野での21本が「集団を対象とするファシリテーション（狭義の「ファシリテーション」）」ではないと推察されるが，これらを除き，ファシリテーション研究論文においては，以下のような流れが読み取れる。心理学・スポーツ分野（1989～）が基礎研究として先行し，アート・デザイン分野（1997～），学校教育・社会教育分野（1998～），社会・公共・地域分野（2000～）で，実用研究的な研究論文が発表され，それに，情報学（2003～），経営・組織・産業分野（2004～），環境・科学分野（2007～），看護学・看護教育分野（2007～）が続いている。医学・医療分野（2013～）は看護学・看護教育分野の先行か

ら、医療技術としてのファシリテーションに加えて集団を対象とするファシリテーションの流れを生んでいる。

2-2 科学研究費助成事業データベース

国立情報学研究所（NII）の科学研究費（科研費）助成事業データベースの検索では、2016年12月31日現在、167件が挙げられた。CiNii Articles 論文検索と同じ分類に沿って、時系列に沿って見てみる（表3）。なお、科研費では、3か年の助成終了後に報告がなされたのち掲載されることも多いため（一部5か年）、2013年までを集計した。この総数は147であった^{*11}。

表3：科学研究費助成事業データベース 研究助成事業の推移

	～1993	～1995	～1997	～1999	～2001	～2003	～2005	～2007	～2009	～2011	～2013	～2015	計
01 アート・デザイン											2	-	2
02 社会・公共・地域						1	3	5	6	6	6	-	27
03 環境・科学						1		2	3	1		-	7
04 学校教育・社会教育		1				2	1	5	11	11	9	-	40
05 心理学・スポーツ							4	1	4	5	9	-	23
06 経営・組織・産業							2	1	4		2	-	9
07 医学・医療			1				1	1	1	4	6	-	14
08 看護学・看護教育					1				6	3	7	-	17
09 情報学								2	1	1	4	-	8
年次計		1	1		1	4	11	17	36	31	45	-	147

一見すると年次計として、2008年と2013年に大きな増加が見てとれる。科学研究費助成事業は、日本学術振興会が主管する大正7年（1918年）に始まる学術振興のための研究助成事業で現在の制度となったのは平成23年（2011年）である。（科研費）助成事業データベースには1965年からのデータが掲載されているが、2008年に報告書の項目が増加したため、よりキーワードにヒットしやすくなったものと思われる。2013年の増加に関しては、事実上の予算の大幅な増額と総合系の分科や細目の充実がありそれを反映したものと思われる。

分野計では、学会誌と紀要の論文の集計と同じく、学校教育・社会教育分野が最も多かった。次に社会・公共・地域分野、心理学・スポーツ分野と続いている。2008年、2013年を考慮するにしても各分野とも増加の傾向を持っている。

集団を対象とするファシリテーション以外のファシリテーション研究は、『カリウムチャンネル機能を制御する新規細胞内生理活性物質探索の新戦略』（古谷和春、大阪大学、若手研

究 (B), 2010) はじめ医学・医療分野 (薬理学) ほか, 『植食性動物プランクトンにおけるファシリテーション効果』(牧野 渡, 東北大学, 特別研究員奨励費, 2002) など環境分野 (生態学) などあわせて9件あった^{*12}。

学校教育・社会教育分野では, 『ファシリテーションを援用した「話し合いを見える化」する学習活動の開発』(工藤哲夫, 東京学芸大学, 奨励研究, 2008) (教科教育学), 『ファシリテーターの育成を通じた教育力向上プログラムの開発』(白井靖敏, 名古屋女子大学, 基盤研究 (C), 2010) (教科教育学) など, 教育効果の分析や在り方や役割に関する研究, 理論構築, 教科書の作成, プログラムの開発, 実証的研究が, 教育学・教科教育学・教育工学・学習支援システム・外国語教育・特別支援教育・科学教育などの細目分野に研究助成されている。

社会・公共・地域分野では, 『参画型公共事業計画における理論と実践』(水谷香織, 岐阜大学, 特別研究員奨励費, 2003) (交通工学・国土計画) など, 国際比較やモデリング手法研究, アクションリサーチ, 研修の開発, 評価法, 実証研究, 教材開発が, 社会学・政治学・哲学・倫理学・文化人類学・民俗学・公衆衛生学・社会システム工学・安全システム・都市計画・建築計画・交通工学・国土計画・科学社会学などの細目分野に研究助成されている。

心理学・スポーツ分野では, 『セルフデザイン・リーダーシップ: 個人の強みを活かすリーダー研修プログラムの開発』(本山智敬, 福岡大学, 基盤研究 (C), 2013) (臨床心理学) など, プログラムの開発, 運営方法・技術調査・実験, 実践的研究, 実証的研究が, 臨床心理学・社会心理学・社会福祉学・認知科学・スポーツ科学などの細目分野に研究助成されている。

ほか, アート・デザイン分野では, 『インプロ教育のアクションリサーチ』(高尾 隆, 東京学芸大学, 若手研究 (B), 2011) (芸術学・芸術史・芸術一般) など, 芸術学・芸術史・芸術一般・デザイン学などの細目分野に研究助成されている。環境・科学分野では, 『地域共同体によるアジア型沿岸資源管理の段階的発展過程』(川邊みどり, 東京海洋大学, 基盤研究 (C), 2007) (環境影響評価・環境政策) など, 生態・環境・資源保全学・環境影響評価・環境政策・森林科学・環境農学などの細目分野に研究助成されている。経営・組織・産業分野では, 『組織開発のプロフェッショナルによる実践知生成のメカニズム』(佐野享子, 筑波大学, 基盤研究 (C), 2013) (経営学) など, 経営学・会計学などの細目分野に研究助成されている。医学・医療分野ではすべてが集団を対象とするファシリテーションではない助成研究であったものの, 早い時期から看護学・看護教育分野の助成数が顕著であった。『ファシリテーター育成教育プログラムの開発と評価』(守田美奈子, 日本赤十字看護大学, 基盤研究 (B), 2001) (臨床看護学) など, 基礎看護学・臨床看護学・生涯発達看護学・地

域・老年看護学などの細目分野に研究助成されている。情報学分野では、『会話エージェントによるグループ討論コミュニケーションスキルの評価と改善支援の研究』（中野有紀子，成蹊大学，基盤研究（B），2013）（ヒューマンインタフェース・インタラクション）など，知能情報学・知覚情報処理・知能ロボティクス・ウェブ情報学・サービス情報学・ソフトウェア・ヒューマンインタフェース・インタラクション・情報図書館学などの細目分野に研究助成されている。

科研費研究助成のもつ傾向は，学校教育・社会教育分野が牽引し，次いで，社会・公共・地域分野と心理学・スポーツ分野が活発であることが見て取れるが，年を追ってどの分野にもまんべんなく広がっていく流れも見て取れる。教育プログラムの開発や実際の状況調査など，より具体的な実理性が強い助成研究は，論文が先行する分野もあり，その逆の順となる分野も同程度あった。

3. ファシリテーター，ファシリテーション，ファシリタティブ

デューイスクールの実験は，世紀が変わろうとする前後の3年間であった。ジョン・デューイは，なすことによって学ぶ，ファクトリー（画一教育）ではないワークショップ（手づくり教育）を，と「体験学習論」を説き実践した。教育に必要なのはティーチャー（教師）であるが，学習に必要なのはファシリテーター（促進者）である，と。

これが1902年の「ファシリテーター」の初出で，以後，ファシリテーターに関する研究は，半世紀の間に，クルト・レヴィンらのエンカウンターグループの活動及び研究，いくつものアート・ワークショップやグループセラピーの活動を経て，ファシリテーターから派生してそれを概念化した「ファシリテーション」の語用が始まってゆく。心理学・教育学が牽引しながら，次第に援用の範囲が都市計画・建築デザイン・まちづくり，さらには，組織論やマネジメントスキルへと広がってきた。2000年が国際ファシリテーター協会，2003年が日本ファシリテーション協会の設立の年である。わが国では特に，2009年イマジン・ヨコハマでのワールドカフェ以降，急速に社会領域に浸透していく。近年の「アクティブラーニング」の語用を契機とする教育学のさらなるファシリテーションへの傾注も大きな変容である。

ファシリテーター研究ならそれは，配役であり役職への研究であり，ファシリテーション研究ならそれは機能や作用やしぐみ，現象の研究となろう。役割認識に基づくファシリテーター研究が教育学から生まれ，そして，その役割からファシリテーションの機能が派生分化され社会に活用される用途が広がるにつれ，ファシリテーションそのものも研究対象となつてゆく。ここまで見てきた活用と研究の広がり，2004年よりファシリテーターを明示的に

役職として任じてきた筆者の活動の分野の広がりとも合致する。地域活動や市民活動、行政計画などの社会領域、環境啓発、環境活動運営などの環境領域、組織改革や経営支援、産学官連携、起業家育成などの経営・組織・産業領域、病院経営、他職種連携、医療地域連携、看護教育などの医療領域、そして、2014年広島修道大学着任以降は教育も主軸の分野となった。これらの領域・分野でのファシリテーションについて、これまでなされてきた分野の網羅に立つとき、実践経験を通して見えてくるファシリテーション研究の未来がある。

実務者としてのファシリテーターたちはファシリテーションをどう定義しているか。南アフリカにおいて1991年から民族和解を推進するモン・フルー・シナリオ・プロジェクトに参加したファシリテーターであるアダム・カヘンは、著書『未来を変えるためにほんとうに必要なこと』（2010）中に、「する力」と「させる力」として、力の生成的な面は自己実現の衝動としての「する力」であり、退行的な負の面は他者の自己実現を盗み取る「させる力」である、としている。人は誰かによって解決されたいと願っているのではなく、真の解決は「わたしがやる」によってなされる、と述べ、これが「ファシリテーション」の本質であるとしている^{*13}。

堀 公俊はファシリテーションを、「集団による知的相互作用を促進する働き」としている^{*14}（『ファシリテーション入門』、2004）。

フラン・リースはファシリテーションを「リーダーシップの一形態」で、「グループのメンバーを鼓舞し、誘導し、参加を促して、創造性や当事者意識、生産性を引き出す」と定義している^{*15}（『ファシリテーター型リーダーの時代』、2002）。

中野民夫は、「簡単には答えの出ない問題について問い合う場を作り、対立する集団や個人の間をできるだけ容易にし、切れてしまった関係のみならず、人と社会、人と自然の世界をつなぎ直し、一人ひとりの存在、経験、知恵を引き出し、バラバラではできなかった相乗効果を促し、励まし力づける」としている（要約：田坂逸朗）^{*16}（『ファシリテーション革命』、2003）。

津村俊充は「関わり方のひとつ」で、「個人やグループの気づき、成長（変化）に関わり、“学習”を援助促進すること」としている^{*17}（『ファシリテーター・トレーニング』、2010）。

これらの5つの定義は、社会評論家ジェームズ・スロウィツキーの集合知論になぞらえるなら、「Wisdom of Crowd」であるとも言える^{*18}。「Wisdom of Crowd」は、認知・調整・協調による集合的な意思決定を意味する。その意思決定の賢さは、多様性・独立性・分散性が支える。多様性を欠く単一さ、独立性を欠く親密さ、分散性を欠く専門化は賢さの妨げになる、としている。この論説では、認知を相互確認する「見える」化や、独立性に基づく多様性としての相互触発意見の奨励が強調されている。

ファシリテーターがなすものではないはずの、この集合知論は、カヘンの言う「オープンに話し、オープンに聞く」に相通ずるものであるととれ、堀の言う「対人関係のスキルを用いて隠れている意見を引き出す」に相通ずるものであるととれ、中野の言う「バラバラではできなかった相乗効果を促す」にも相通ずる。

ここに至って、専任者としてのファシリテーター論から、学習の相互支援や集団の相互作用、合意形成、創造的解決を企図する、人のファシリテーション機能論を経て、クラウドはどうふるまうか、そのふるまいの帰結としての集合知の質をどう高めるか、という、場のファシリテーション環境論へと軸足を移すことのできる契機がやってきた感がある。ファシリテーターはいなくとも、ファシリテーションは集合知において機能する、と。その機能が十全に果たされた社会を「ファシリタティブ・ソサエティ（促しあう社会）」と呼ぶならば、「ファシリタティブ・ソサエティ（促しあう社会）」の実現は、ファシリテーションの目標のひとつである。ファシリテーションは、お互いをオープンにしながらか、お互いの触発からまだ見ぬ未来意見を未来創造に役立てることができ「ファシリタティブ・ソサエティ（促しあう社会）」を目指している、と。

4. あなたはどう思うか？ という問いかけ

入学間もない大学1年生には、グループワークの話しあいを仲良しクラブだととらえている者がいる。少なからぬ割合である。友和的に会話すること、楽しく発言の数が多いこと、強引であっても案を一つにまとめることができることを望み、場が、見かけとしてよい雰囲気でない場合、自分たちの班は失敗作だと嘆く。そして他のグループの答と判で押したように同一でないたとたん不安になる。元気なリーダー役がたまたま班内にいて、力強く引っ張ってくればまずはひと安心、異を唱えず和を乱さずその者におとなしくついて行くパターンが最良であるらしい格好である。うちの班には引っ張ってくれるリーダー的存在の者がいなかったのでは会話が盛り上がりずアイデアも散発的で失敗しました、となる。過剰適応とでもいうべきか、同意見に賛同し徒党の行動を起こす以前に、和をなすために異論を隠すことと、学生たちは無自覚のうちに、議論しにくく決めにくい風土の醸成でお互いを拘束している。

「あなたはどう思うか？」と問うことがデンマークの初等教育の是であるという。『しあわせな放課後の時間～デンマークとフィンランドの学童保育に学ぶ』（石橋裕子ほか、2013）に詳しい^{*19}。子どもたちはどれくらい自由に発言できているか、との命題だが、子どもや大学生たちのみならず、本質的には、（少なくとも日本における）集団はめったに「あなた

はどう思うか？」とは聞かない。

会議、審議、議論と語用するときそこには、全般的に、論と論、案と案をぶつけ徒党を組む、同じ意見の者どうしが結託し、違う意見の者と戦ってこそ、質は高まる、もろい論（案）がくずれ、堅固な論（案）が生き残る、とわたしたちは前提している感がある。さらには、論争論戦の最終局面は、多くは多数決となる。その多数決で票が割れるとき、集団内の小さな徒党（派閥）の行動は、また内部に派閥（敵）を生産してゆく。

純粋に「あなたは どう思うか？」と問いかけ、それに純粋に答えることができれば、多くの未知・未解決に対して、集合知的な示唆を得ることができるはずである。この純粋さを阻むものが多くあり、それらを的確に排除し、集団の相互作用を活用しながら集合知を創生することを「ファシリタティブ」なファシリテーションであるとするなら、その純粋さを阻む「ウチ」や「ソト」への考察が、集合知の創生に関する新たなファシリテーションに有効であろう。

筆者がこれまでファシリテーションに関して論文化したものが以下にある。「協創的ヒアリング」の研究においては、ジョハリの未知の窓が未来を開く、として、協創的なヒアリングを行えば固定的な事前固有の意見を聞くのみならず、未来に対して未知の意見を対象者どうしが合成し、協創的な意見を収集をすることができる、とした^{*20}。ここから、ファシリテーションの新しい役割では、発言を引き出すに加えて、引き出された発言どうしのかげあわせを起こしやすくすることが求められるだろう。それはあたかも、現状というウチからソトにある未来を垣間見ようとする行為でもある。

「パブリック・プロセス」の研究では、市民が対話することで生まれる未来について考察した^{*21}。専門性のある行政など実施機関が専門性・専権性に基づいて計画する未来だけでなく、市民の側からの未来考察を、しかしそれだけでは専門性を欠くものとして、その両者の融合をプロセスしてゆくファシリテーションを機序としてまとめた。ここでは、実施機関は専門性ゆえ、あるいは計画主義ゆえ、市民は執行責任を持たないゆえ、それぞれに「ウチ」化し対立する危険をはらんでいる。これに対して、ウチの悪い側面が発露してしまわないよう、ファシリテーションが両者をつなぐイメージを呈した。

「プロジェクトメイド・コミュニティ」に関する研究では、コミュニティは新メンバーで再活性化する、と結論づけた^{*22}。まさに、「ウチ」化がコミュニティの衰えを加速させている。ソトからの血（知）の流入をいかにストレスなく行うかを「プロジェクト」の遂行をチャンスとする旨を説いた。

論文「授業『地域イノベーション論』の試み」では、広島修道大学地域イノベーションコースの授業経験から、地域イノベーション人材の育て方について論じた^{*23}。企業などの

単発のイノベーションを、域内連鎖としての地域イノベーションに昇華させる「つなぎ手人材」= 地域イノベーション人材を大学生が担いながらその経験を持って社会人へと巣立っていく地域貢献と学習の融合の実際を論考した。

そして、論文「地域ファシリテーション論」では、地域という独特の半オープンな共同運営におけるファシリテーションの機序について考察した^{*24}。地域ファシリテーションとは、その地域がよりその地域らしくふるまえるよう促しあえる環境を地域自ら創出することであると見た。これらの研究成果から「ウチとソトをつなぐファシリテーション」は導き出されている。それは、これからの筆者におけるファシリテーション研究の研究方法論の序説をなすものとなるものである。

5. ウチとソトをつなぐ

そもそも「話しあい」「集団共同」は難しい。集団のウチでは、絶えずシグナリングが行われ、それが集団を個化・特化させ、ウチに順応を迫る。本質的な、現状に大きな変更を加える話しあいは、親密度が増せば増すほどしにくくなる。マーク・グラノヴェッターは「弱い紐帯理論」として、親密度が高いほど発言に制限が生まれることを説いている^{*25}。原則わたしたちは、親密度が高くなることを目指して集団でのふるまいを設計している。親密度の高さを根拠に増した発言力は、ウチ化の高さでもある。過去と同じ状況でかつ同じ方向を向くとき、メンバー間の意思決定や共同は、親密度が高いときほど質も高い。しかしひとたび状況が変化したり、あるいはメンバー間に方向性の違いが発生したとき、とたんに脆弱性が増し、ウチのウチ化が変化や対応の力を削いでしまう。

集団の共同の力を削ぐさまざまな「ウチとソト」がある。組まれた徒党と異意見、過去の成功と将来の基準、コンフォートゾーンとストレッチゾーン、他者の前例と自陣への援用。情報の独占というウチ化と公開を漏洩と捉えるソトの範囲、ウチに秘めた思いの発表とソトとのやりとり、ウチ側のメンバーの共益とソトを意識する公益。現状の共益と未来の公益、今ある理のウチに収まる議論と、ソトも包摂する止揚の議論。部分最適というウチと全体最適というソト。延長線上にプロットされる継承温存の未来予測と流れのソトにある不連続な可能性も考慮するリープフラッグの未来創造。さまざまな、つなぐべきウチとソトが存在する。ウチはウチ、ソトはソト、という固定性と排他性や、専門と専用による先導もウチとソトを分断する要因となりうる。

ファシリテーターはどうふるまえば、ウチとソトをつなぐことができるか。そもそもファシリテーターでないならこれまで誰がそのような場を進行してきたのか。リーダーが徒党を

強化しながら、か。コーディネーターが自説を元に、か。議長や司会が定型的に機械的に、か。クラウドによる集合知を目指すのであれば、できる限り簡素なファシリテーションがよい。「引き出し、かけあわせ、進める」ファシリテーションである。強い介入権を持つリーダーシップあるファシリテーターのファシリテーションから、集合知に与する環境創造型のファシリテーションへという文脈の変容が「ウチとソトをつなぐファシリテーション」であるとも言えることができる。

「引き出し、かけあわせ、進める」のうち、もし「引き出す」が体现されていないとするならそれは、親密度が高すぎるゆえを疑い、「かけあわされない」なら、保有する自意見への固執から触発意見の生成がなかなかうまくいっていないことを疑い、「進められない」なら、話しあい後のポストプロセス（事後の活用計画）があいまいであることを疑い、環境を緩やかに変容させる「促し」を行う。

カヘンの言う「する力とさせる力」は、ウチに軸足を置いたまたであることを「ソトに対してさせる力を発揮しようとしている」と表現し、「ソトに支点を置くこととする力を発揮しようとしている」と表現することもできる。人にさせることで未来を創造してきたやり方を改めよ、というタイミングに来ている、とも言えるだろう。

引き出し、かけあわせ、進める「ウチとソトをつなぐファシリテーション」の留意点を集合知の3段階に即して列挙する。

認知（開示による相互確認）：見えているものどうしをつなぐ 調整（独立した多様性）：意見と意見をつなぐ 協調（相互触発意見）：新たな意見生成で未来をつなぐ
--

■ 認知（開示による相互確認）：見えているものどうしをつなぐ

人は見たいものしか見ていない。開示を促し、見ているもの、見えているものどうしをつなぐ

1. あなたはどう思うか？

自己主張の経験の少ない人ほど、他者の自己主張も制限する傾向がある。「べき論」が先に立ち、正解を無上とし、不正解を攻撃する。自己がどう考えるか、どう感じるかではなく、どう常識に沿うかを優先させてしまう。「あなたはどう思うか」を問うこと、その問いに答える発言の多様化を許すこと。発言の自由度がなければ、個の意見形成が、過去の枠組みに左右されてしまう。

2. ウチをソトに開く対話

リーダーないし集団を代表する強い規定路線の意見が、ホンネを言える場をつくってこなかったとしたら、そのツケは結局リーダーや集団に回ってくる。エドモンドソンは「チーミング」として、チームは安全な場であるべきである、としている^{*26}。まずは精神的ウェルネスのために、

ホンネを言うことから、だとするなら、ウチなるホンネをソト化することは精神衛生上重要である。

3. 他者を介して自らを知る

ウチは、ソトによって、自覚的なウチを得る。無自覚なウチに比べ、その自覚的なウチは、より適正に機能する。

4. オープンに聞く状況をつくる

話すこと以上に、聞くことにはクリエイティビティがある。聞くこと自体が環境をなしており、どう聞き取ったかを示すことによって環境が少しずつ変容していく。話したことの再構成以上に、聞き取ったことの再構成に、全体包摂としての集団力学（グループ・ダイナミクス）が働く。逆に、保有する自意見と比較しながら聞いてしまうとき、その優劣を競うがゆえに、他意見の咀嚼の前に否定や批判、批評が先立ってしまう。キース・ソーヤーの言う「グループジーニアス」の会話とは、否定せずに聞く会話である^{*27}。

5. ウチ化を回避するセミオープン

可能なら、場を少しだけ公開する。その場限りの（自集団の共同のための）新たな場づくりとして臨時の場をセミオープンにする。

■調整（独立した多様性）：意見と意見をつなぐ

保有する自意見から出発し、他意見への理解と受容を促し、意見を分解し再構成する

1. 第三者機関、立会人

適正であればファシリテーターは、その場に存在するだけで、第三者機関、あるいは立会人としての機能を発揮できる。情報が増えれば増えるほどメンバー個々は、いくつもの「ウチの中のウチ」を形成し、先鋭化し専門化していく。専門領域の数だけが細分化して増え、ゆえに専門と専門の狭間もまた増大していく。

2. 意味、意義、役割を見い出す

意見そのものを吟味しながらも、意見一つ一つの、全体からの意味や、意義、役割を見い出すよう務める。

3. 問いを再設定する

集団の共同作業を始める前にあった問いは、場の変容によってすでに役割を終えている可能性がある。ウチにあった「これまで」と、ソトにある「これから」について、場の変容にあわせて新たな問いを見いだしてみる。

4. 「見える」化する

堀が「構造化」と呼ぶファシリテーショングラフィック、フレームワーク、板書などを活用して、書き出して整理する。「見える」ことによって、それらの発言や状況認知が環境へ影響をもたらす、判断の俯瞰化に寄与する。

5. マーケティング

意見の発言はその内容もさることながら、シグナリングと捉えることもできる。「見える」化したとき、そのシグナリング行動はすでに環境に影響を与えており、また、その環境によって次の行動が（相関的に）喚起されてゆく。

■協調（相互触発意見）：新たな意見生成で未来とつなぐ

場合と時の範囲を再設定し、創造的な合意と事後の行動設計を行う

1. ウチの範囲をとらえなおす

ウチをウチと思う範囲は案外同一ではない。範囲の捉え直しが可能なら、意見の可否の基準を変えることができる。固定した範囲の中で解決策を探るの反対象限として、解決策が効果を発揮する範囲を逆に規定しなおすことも、ときとして有効である。ウチとソトをつなぐファシリテーションとは、全体最適の範囲の再設定である。

2. ポストプロセス

生産の場か消費の場かを分ける分水嶺はポストプロセス（事後の活動）にある。事後の行動の影響の範囲を規定するポストデザイン（成果の活用計画）に着手する。その事後行動が集団のアウトプットの質を規定する。

3. 変容のタイミング

引き出された発言の重要性を「ジョハリの未知の窓」になぞらえるなら、相互触発された触発意見による意見合成であるときほど、未知へ立ち向かった証拠であると見なせる。そのような創造的合意形成が望ましいが、そもそもイノベティブでなければファシリテーションは機能しているとは言いがたい。話しあい取引ではない。第三の案がなければ、どこかに勝ち負けが残ってしまう。納得解に向かわない反論からは何も生まれない。盲点だらけの個の視点の欠落を埋めあい、エラーに対する耐性を上げていく共同行為こそが集合知である。否定すべきは「過去への拘泥」であって、過去を有益に活用するという積極的な意思をもたない、盲目的な過去礼賛こそ未来を過小評価してしまう。「しない」原因を追究しても、「する」には昇華しない。

4. 個の成長と集団の成長の同時性

個が成長するとき集団の成長も歓迎され、集団が成長するとき個の成長も歓迎される。それらが同時でなければ、篡奪を感じ取ってしまう。個が成長し集団が成長しないとき、集団への貢献性が低いと見なされ、集団が成長しても個が成長しないとき、個は集団に利用されたと感じる。

5. プロトタイプング（試作実験）

判断をある程度保留したまま小さな行動を起こしてみることも効果的である。形に表れたものを見れば理解できることもある。エリック・リースは「リーン・シンキング」として、「すばやく立ち上げ、すべてを学習と捉え、臨機応変に変容しながら成長する」ことを説いている^{*28}。思考を試作実験に、とコマを進め、そのあとで、意味化し定着させる、という順番の入れ替えも、少なからず有効である。

アイデアに困っている人よりむしろ多いのは、古いアイデアを捨てられなくて困っている人だ。「継続は力なり」の罫。力がなくなっても継続だけすることで、よけいに力が減っていく。「発展の一本調子」だけで集団を維持してきた不幸の劣後ケアなら、何を「変える」か、ではなく、何を「続け残す」かという描写に切り替えなければコンフリクトは解消しない。ウチとは、その集団、もしくは個の、過去の記憶の総体である。それは未来を約束するものでもないし、逆に規定するものでもない。集合知に向かうファシリテーション

は、これらのことに冷静に気づく促しの相互化である。

6. ファシリテーション学へ

「ウチとソトをつなぐファシリテーション」論は、ファシリテーションが社会の「つなぎ手」となりえるという仮説である。仮説はある意味、実務ファシリテーターとファシリテーション研究者の数だけあるだろう。それらの仮説の置き所として、この論考では、ファシリテーション学の創設を提案しながら、かつ、それを目指したい。ファシリテーションはどこへ向かうのか？ 社会関係資本に向かうファシリテーション。グループジェニアスに向かうファシリテーション。「学習する組織」に向かうファシリテーション。集団力学、集団の知的相互作用、集合知を活用しながら、どう社会は賢くなっていくべきなのか、に向かうファシリテーション。

ソーシャルデザインのプラットフォームとしての「ファシリテーション学」。ウチの結束力が奏功することもあるしソトからの視点が有効であることもある。それらを「時として」とせず、常に必要で活用可能なプラットフォームとする、そのためのファシリテーションの新しい役割について論じる場が「ファシリテーション学」である。

ウチとソトをつなぐ、包摂のプラットフォームを模索する「ファシリテーション学」では、多数決の代替となるファシリテーションの可能性についても論じられることだろう。多数決の前提条件は、個は確固たる唯一意見を内包しており、その意見どうしは相互に矛盾する孤立意見であり、かつ完成度の高さゆえに独立的に選択可能であるという共通ルールの理解である。「決める」ことの民主性をどう実現するかにおいてはすぐれた研究が多数存在するが、個の意見の確信性の高さがまちまちであるとき、集団（公共）はどう振る舞えばよいかは、なかなか難しい命題である。「決め方の経済学」を補完するファシリテーションが確立できれば、社会創造の効率化を図ることができる。

リベラルアーツとしての「ファシリテーション学」では、話しあうことの意義、意味、動機の有用性が強調されるだろう。相互拘束の緩和と共同の促進、そしてチャレンジの奨励。お互いの動機（モチベーション）を削がない協調性と、集団による意思決定力。すべての人がファシリタティブであるとき実現する社会とは、チャレンジし、かつエラーへの耐性が強い社会である。

「ファシリテーション学」が提言したいささやかなゴールイメージがある。一つは、大学の教養学（リベラルアーツ）としての「ファシリテーション・スキル」科目の標準装備である。アクティブラーニングを推進するのは本来学校や教員ではなく、学生・生徒自身のはず

である。リベラルアーツとして学ぶファシリテーションは、学生・生徒側からのアクティブラーニング推進に寄与するはずである。

二つめは、市民対話の場の常設である。対立構造で行政にもの申す苦言の市民ではなく、市民にできることを市民として活動化する、その苗床となる市民どうしの出会いと発言の場。わずかな例として市民活動によってそれを創設した例にも携わったが、抜本的な標準装備へのプロセスデザインを「ファシリテーション学」が担いたい。

そして三つめは、決めるための議論と分離する創案のための予備対話の場の、とりわけ国家政府への援用である。議論の前に進めておきたい対話がたくさんある。事前の対話の場の創出と、加えて、諮問・審議の専門委員会に依拠するのみでない委員会と委員会をつなぐ橋渡しマネジメントプラットフォームの装備まで視野に入れることができれば、より「ウチとソトをつなぐ」理想にかなう。

とりあえずは、このようにして新しい社会像を議論する場としての「ファシリテーション学」の前垂れとなる議論を、このような論考上で続けるさらにその前垂れとしての、「ファシリテーション研究」の俯瞰ができたことを、エポックとしておく。

7. お わ り に

ギブスのリフレクションの成立のプロセス (Gibbs framework) を援用するなら、1) 記述・描写 (Description) 2) 感覚 (Feeling) 3) 評価 (Evaluation) 4) 分析 (Analysis) 5) 総合 (Conclusion) 6) 行動計画 (Action Plan) と、ファシリテーションの学究的研究もまた段階を経るはずである^{*29}。記述・描写と感覚の精査が一定の成果を収めているなら、ここからは、評価・分析・総合・行動計画へとコマを進めたい。その過程でようやくデカルトの方法序説の「明証・分析・総合・枚举」のまっとうへの端緒に立つことができるのであるが、それも含めてファシリテーション学の希求としたい。

ウチはウチ化しすぎず、ソトをソトと見なしすぎない冷静さ、俯瞰性、視座への能動性が、よい関係構築＝社会構築の重要要素のようである。集団という、なりゆきがなしたかに見える事象への受動性を、集団を活用する、もしくは、編み出したい集合知のために多様性によって構成された集団を人為として形成する、という能動性に変容させること。そこに、ウチとソトをつなぐファシリテーションの妙味がある。

その妙味を、各分野に遍在するファシリテーションについての論説・研究を編纂・統合・学際化してゆくファシリテーション学が、知見と研究成果、研究分野を縦串とし、集団とその相互作用に関する新しい考察を横串として、社会のさまざまな分野・領域に、新しい未来創造の光として援用していくはずだ。

さらに、研究課題は多くある。この論考は日本における論文の研究に限ったが、この研究の潮流は、世界はどうであるのか、さらに各分野の横断的な研究に焦点を当てるならどうであるのか、いくつもの課題を発見した考察でもあった。論文や研究では数的に少なかったが、実務ファシリテーションでは大きな潮流であるホールシステム・アプローチへ注目が高まる経緯との関連もこれからの研究課題としたい。ソトをウチ化するパイロット・グループとユーザー・イノベーションとしての学生たちの活躍は、大学改革の例ではあるが、新しいファシリテーション学の分析の対象ともできるはずだ。いまいちど、ファシリテーションはファシリテーターだけが担うのではない、と主張しておくためには、非ファシリテーターのファシリテーションについても研究が必要だ。さらには、ファシリテーションされる側の研究を試みたい。いわばこれは、「ファシリテーター」とも呼べる存在で、「あなたは思うか？」との問いに率直に答えられる、関係性構築に能動性を持つ人格の涵養につながる研究である。

中立性を旨とするファシリテーターが、成果責任を放棄してはならない。すべては成果のために配置されたパーツである。複雑系において、まだ見ぬ課題をまだ見ぬやり方で解くための集団と集合知の活用を、ファシリテーターとして透徹しつつ、学問分野としての確立を目指したい。

最後に謝辞を述べる。これまでファシリテーション研究の急先鋒としてこの10年の活動のプラットフォームをなしてきた特定非営利活動法人日本ファシリテーション協会とその関わりあるみなさんに感謝する。そして、多くの現場に誘ってくださったファシリテーション活動の主催者のみなさん、列席者、参加者のみなさん、ほか、多くのみなさんへ感謝する。「オープン・スペース・テクノロジー」の創案者ハリソン・オーエンの至言は「誰であれ、適任者がやってくる」である。わたしが適任者であったかどうかは定かではないが、お声がけをくださったすべての現場に感謝すると共に、確実に言えることは、その現場はわたしにとって、どんな現場であれ、最適の学びをもたらしてくれた現場であったということだ。すべての現場そのものこそ感謝に堪えない。

注

- * 1 デカルト『方法序説』はここでは、谷川多佳子訳、岩波書店版（1997）に依った。
- * 2 ここでは、山内祐平・森 玲奈・安斎勇樹の『ワークショップデザイン論』（2013）、および、杉万俊夫『グループ・ダイナミクス入門』（2013）を参照した。
- * 3 小野 浩『スペース「市場でのシグナリング活動」』（日本労働研究雑誌 58（4）、2016）
- * 4 ダニエル・ピンク『モチベーション3.0』（2010）
- * 5 科学技術・学術審議会学術分科会によると、日本学術振興会科学研究費助成事業（科研費）の

分科細目表等の設定は、日本学術振興会が改正案を作成し科学技術・学術審議会学術分科会科学研究費補助金審査部会が審議・決定を行っている。平成26年（2014年）以降は5年毎に行うこととなり、かつ、細目数の大幅な減少が検討されている。あわせて、分科細目表がわが国の学問分野を分類し設定するものではないことを明確にすることも検討されている。これは、細分化が進むと新たな研究分野や異分野融合の研究は応募しにくい面もあるための抜本的な見直しであるとしている。まさに「ファシリテーション」が研究フィールドの一つとしたいものが、異分野融合である。

- * 6 堀 公俊『ファシリテーション入門』（2004）
- * 7 中野民夫『ワークショップ』（2001）
- * 8 論文検索のデータベース国立情報学研究所（NII）学術情報ナビゲータ CiNii Articles で、「ファシリテーション」を含む論文を検索し表にまとめた。表題及び検索可能な項目に「ファシリテーション」を含むもので、データベースに掲載されているものを検索した。積極的にキーワード設定しているものは検索でき、そうでないものは検索できないという機械的な調査ではあるが、また、「ファシリテーション」と同じように「ファシリテーター」など周辺の語用についても調査すべきであるが、ここでは全体を俯瞰するため、この機械的な検索を研究の端緒とした。
- * 9 以後、表題等の表記については、検索結果に準じた。掲載には（検索可能な状態になることには）タイムラグがあると思われるが、全体を俯瞰する目的からするならば数的には誤差の範囲であると判断した。学会誌と表記のあるものは学会誌掲載文とし、学会名を含まない大学の機関誌と思われるものは紀要と判断し、それ以外を専門誌と判断した。講演抄録や予稿集寄稿なども含まれると思われるが、これも、数的には誤差の範囲であると判断した。
- * 10 文中 1. 2. 3. 表記は、中野民夫前掲書『ワークショップ』の分類、①②③表記は、堀 公俊前掲書『ファシリテーション入門』の分類、01 02 03表記は、表中の筆者の分類。
- * 11 学術情報ナビゲータ CiNii Articles の論文検索と同じように、国立情報学研究所（NII）科学研究費助成事業データベースで、「ファシリテーション」を含む研究助成事業を検索し表にまとめた。事業名及び検索可能な項目に「ファシリテーション」を含むもので、データベースに掲載されているものを検索した。積極的にキーワード設定しているものは検索でき、そうでないものは検索できないという機械的な調査ではあるが、また、「ファシリテーション」と同じように「ファシリテーター」など周辺の語用についても調査すべきであるが、ここでは全体を俯瞰するため、この機械的な検索を研究の端緒とした。
- * 12 以後、事業名等の表記については、検索結果に準じた。また、研究者は研究代表者のみを表記した。なお、3年を考慮してもかつ掲載には（検索可能な状態になることには）さらにタイムラグがあると思われるが、全体を俯瞰する目的からするならば数的には誤差の範囲であると判断した。
- * 13 アダム・カヘン『未来を変えるためにほんとうに必要なこと』（2010）
- * 14 堀 公俊『ファシリテーション入門』（2004）
- * 15 フラン・リース『ファシリテーター型リーダーの時代』（2002）
- * 16 中野民夫『ファシリテーション革命』（2003）
- * 17 津村俊充『ファシリテーター・トレーニング』（2010）
- * 18 ジェームズ・スロウィツキー『「みんなの意見」は案外正しい』（2006）
- * 19 石橋裕子・糸山智栄・中山芳一『しあわせな放課後の時間』（2013）
- * 20 田坂逸朗『地域イノベーションを促進する協創的ヒアリング手法の研究——未来創造のためのファシリテーション——』（広島修大論集 第55巻 第1号（2014年9月）、広島修道大学）
- * 21 田坂逸朗『パブリック・プロセスとは何か？——ファシリテーションが変える、市民の未来創造——』（広島修大論集 第55巻 第2号（2015年2月）、広島修道大学）
- * 22 田坂逸朗『プロジェクトメイド・コミュニティ論——コミュニティ再生への、ファシリテーションからのアプローチ——』（広島修大論集 第56巻 第1号（2015年9月）、広島修道大学）
- * 23 田坂逸朗『授業「地域イノベーション論」の試み——地域イノベーション教育による社会貢献と教育の統合』（ひろみら論集 創刊号（2015年12月）、広島修道大学）
- * 24 田坂逸朗『地域ファシリテーション論』（広島修大論集 第56巻 第2号（2016年2月）、広島修道大学）
- * 25 野沢慎司『リーディングス ネットワーク論——家族・コミュニティ・社会関係資本』勁草書

房 (2006)

- *26 エイミー・C・エドモンドソン『チームが機能するとはどういうことか』(2014)
- *27 キース・ソーヤー『凡才の集団は孤高の天才に勝る』(2009)
- *28 エリック・リース『リーン・スタートアップ』(2012)
- *29 安藤敬子・古庄夏香・原 百合・青山和子・窪田恵子・小田正枝『基礎看護学実習の記録における看護専門職としての思考に注目した研究：リフレクティブサイクルを用いて』(西南女学院大学紀要12 (2008), 西南女学院大学)

参 考 文 献

- デカルト『方法序説』岩波書店版, 1997
- 谷川多佳子『デカルト「方法序説」を読む』岩波書店, 2014
- 山内祐平・森 玲奈・安斎勇樹『ワークショップデザイン論』慶應義塾大学出版会, 2013
- 杉万俊夫『グループ・ダイナミクス入門』世界思想社 (2013)
- 杉万俊夫『コミュニティのグループ・ダイナミクス』京都大学学術出版会 (2006)
- 小野 浩『スペース「市場でのシグナリング活動」』日本労働研究雑誌 58 (4), 2016
- ダニエル・ピンク『モチベーション3.0』講談社, 2010
- 堀 公俊『ファシリテーション入門』日本経済新聞社, 2004
- 中野民夫『ワークショップ』岩波書店, 2001
- 中野民夫『ファシリテーション革命』岩波書店, 2003
- アダム・カヘン『未来を変えるためにほんとうに必要なこと』, 英治出版, 2010
- アダム・カヘン『手ごわい問題は, 対話で解決する』, ヒューマンバリュー, 2008
- フラン・リース『ファシリテーター型リーダーの時代』プレジデント社, 2002
- 津村俊充 (編) / 石田裕久 (編) / 南山大学人文学部心理人間学科 (監修)『ファシリテーター・トレーニング』ナカニシヤ出版, 2010
- ちよんせいこ『人やまちが元気になるファシリテーター入門講座』解放出版社, 2007
- 西村佳哲『かかわり方のまなび方』筑摩書房, 2011
- ケネス・J・ガーゲン『あなたへの社会構成主義』ナカニシヤ出版, 2004
- 香取一昭 / 大川 恒『ホールシステムアプローチ』日本経済新聞出版社, 2011
- デヴィッド・ボーム『ダイアログ』英治出版, 2007
- C・オットー・シャーマー『U理論』英治出版, 2010
- ジョセフ・ジャウォースキー『シンクロシティ』英治出版, 2007
- ジェームズ・スロウィツキー『「みんなの意見」は案外正しい』角川書店, 2006
- 西垣 通『集合知とは何か』中央公論新社, 2013
- 石橋裕子・糸山智栄・中山芳一『しあわせな放課後の時間』, 2013
- 田坂逸朗『地域イノベーションを促進する協創的ヒアリング手法の研究——未来創造のためのファシリテーション——』広島修大論集 第55巻 第1号, 2014, 広島修道大学
- 田坂逸朗『パブリック・プロセスとは何か? ——ファシリテーションを変える, 市民の未来創造——』広島修大論集 第55巻 第2号, 2015, 広島修道大学
- 田坂逸朗『プロジェクトメイド・コミュニティ論——コミュニティ再生への, ファシリテーションからのアプローチ——』広島修大論集 第56巻 第1号, 2015, 広島修道大学
- 田坂逸朗『授業「地域イノベーション論」の試み——地域イノベーション教育による社会貢献と教育の統合』ひろみら論集 創刊号, 2015, 広島修道大学
- 田坂逸朗『地域ファシリテーション論』広島修大論集 第56巻 第2号, 2016, 広島修道大学
- 野沢慎司『リーディングス ネットワーク論——家族・コミュニティ・社会関係資本』勁草書房, 2006
- カール・アルブレヒト『なぜ, 賢い人が集まると愚かな組織ができるのか』ダイヤモンド社, 2003
- エイミー・C・エドモンドソン『チームが機能するとはどういうことか』英治出版, 2014
- キース・ソーヤー『凡才の集団は孤高の天才に勝る』ダイヤモンド社, 2009
- エリック・リース『リーン・スタートアップ』日経BP社, 2012

- 安藤敬子・古庄夏香・原 百合・青山和子・窪田恵子・小田正枝『基礎看護学実習の記録における看護専門職としての思考に注目した研究：リフレクティブサイクルを用いて』西南女学院大学紀要12, 2008, 西南女学院大学
- トーマス J. ハーリー・アニータ・ブラウン『会話型リーダーシップ 変革のために共に考える』World Cafe 20 Handbook, 2015 (初出は Oxford Leadership Journal, March 2010・Volume1, Issue 2)
- 大本義正・戸田泰史・植田一博『議論の発散収束と非言語情報に基づくファシリテーション行動の分析』人工知能学会全国大会論文集 24回, 2010
- 高崎 隼・ジドラスコ・タチアナ・白松 俊・大冨忠親・新谷虎松『合意形成を導くファシリテーション機能拡張のための議論コーパス作成支援システム』情報科学技術フォーラム講演論文集9 (2), 2010
- 大本義正・戸田泰史・植田一博・西田豊明『議論への参加態度と非言語情報に基づくファシリテーションの分析』情報処理学会論文誌 52 (12), 2011
- 佐々木英和『ファシリテーター概念に関する理論的考察：ファシリテーション実践の体系的把握につなげるための覚書』宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要 34, 2011
- 根本啓一・高橋正道・林 直樹・堀田竜士『ワールドカフェ型のダイアログにおけるターンテイキング構造と参加者の理解度の関係性の分析』研究報告グループウェアとネットワークサービス (GN) 2012-GN-84 (20), 2012, 情報処理学会
- 佐々木英和『会議ファシリテーションの進行手順に関する基盤的考察：「現実」と「理想」とを架橋する「方法」の理論的意味』宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要 37, 2014
- 長曾我部まどか・榊原弘之『ワークショップにおける相互補完的対話の分析』都市計画論文集 50 (1), 2015
- 伊藤孝行・奥村 命・伊藤孝紀・秀島栄三『多人数ワークショップのための意見集約支援システム Collagree の試作と評価実験：～議論プロセスの弱い構造化による意見集約支援～』日本経営工学会論文誌 66 (2), 2015

Summary

Facilitation as the method for connecting inside and outside
——Introduction to the way of facilitation research——

Itsuo Tasaka

As the introduction to the way of facilitation research, three viewpoints are described in this article. As the first theme, the trend of facilitation research is described. Practically, the concept and skills of facilitation has been mainly delivered and widely known. On the other hand, in the academic field in Japan, facilitation has been dealt with as related topic mainly with education, medicine (rehabilitation), nursing care, and psychology. Based on this main trend, it is investigated how facilitation should be studied from now on.

Secondly, taking another step further from the discussion about concept, skills and research fields of facilitation, the core nature of facilitation is discussed. Here, the hypothesis that facilitation takes the role of connection, “Facilitation as the method for connecting inside and outside,” is examined.

The third theme is the facilitation research in the future. The probability that facilitation itself is studied as cross-sectional and interdisciplinary research object is discussed. Finally, the author suggests how the facilitation research, installation of facilitation into society and facilitative society should be.